

# 遍路文化は 自他同一の世界



所へ 第58番札所  
「四国遍路」  
世界文化遺産  
の代表世話人  
霊場住職・四国  
遍路文化の会  
代表世話人  
山田 憲正

小山田 憲正



「へんろ道文化」世界遺産化の会総会&フォーラム (H18.6.24)

お遍路がブームと言われて久しい。当寺にも毎日、日本の各地から、またこの1カ月の間でも、アメリカ人、韓国人、台湾人、フィンランド人、イスラエル人と、様々な国からやって来ている。この四国の遍路道は、弘法大師が開かれた道ではあるが、時代と共に色々な顔を持つている。

初めの頃は、修行僧が多く行き交ったであろうが、後に在家の信者達が、亡き人の供養の為、あるいは来世に願いを託して歩かれた。

暗い時代には、業病と差別された病のせいで、家族を庇う為には四国を終焉の地を選んだ。なぜ四国だったのだろうか。最大の理由はもちろん弘法大師の修行された土地だからではあるが、それで1000年も続いたであろうか。

私が30年前前に四国にやってきた時、陸続きではなかった。フェリーで2時間

近くもかかる島だった。今日でも経済的には決して恵まれてはいないが、厳しい環境の中で一生懸命生きている四国の人々が、遠来の旅人を温かく迎え入れることは、自然なことであった。物見遊山で来る旅人など一人もいない。険しい山に登り、延々と続く海岸をとぼとぼと歩く姿に、自分達の姿を見付けたことであろう。1400キロというとても長く道のりを、治安も定かでない中、大変な覚悟で来られた旅人たち。今日も、年間何千人もの徒歩遍路の人々がやって来られる。数十万人と言われる自動車遍路も、叶うことなら徒歩で、という思いは同じであろう。人は車という便利な移動手段を發明しても、徒歩にこだわる。数千人の為に、何万人という人が心をくだき、汗を流す。特異な現実だが、そこには一人の人間としてのいのちの重さがある。

出身も地位も問わない、罪人も白衣という死装束をまとい、遍路行の中では許され、救われているのである。

しばらく前に、当寺の通夜堂に泊まったお遍路さんが、朝勤行の後に打ち明けたことは、殺人という罪で刑務所から出所したばかりで、殺した相手の供養の為の遍路だという。2カ月後に彼は再び泊まっていたが、今回は毎日が感謝の遍

路をさせていただいているという。

とてつもなく広く大きな心も、小さくしてみじめでどうしようもない心も、同じ一人の心。お遍路さんに接待している私達は、私の私に供養しているのだと、そんな心根が四国には息づいているのだと思う。接待する者とされる者の区別がなく、私は彼に宿の接待をしたが、彼は感謝のこころを私に接待してくれた。彼が忘れていた心の優しさを、四国の人々が思い出させたのだ。

さて、仲間と共に始めた、「遍路道文化を世界遺産に」という運動も、10年が過ぎようとしている。その間、日本の経済も大きな波があり、世界中でテロによって多くの命が失われた。20世紀は貧困との戦い、21世紀は宗教での戦い、そんな状況が生まれつつある。

お遍路を一つの文化ととらえ、四国の人々の生き様から、「共に生きる」メッセージを世界に発信する我々の運動は、益々大切なものとなっている。署名運動、フォーラム、遍路道掃除と続けているが、弛まず続いたことにより、今大きなうねりが起きようとしている。四国のユネスコが、世界遺産の可能性を検討するフォーラムを開き、商工会、経済界が各々の立場で運動を起している。「いやしの



清掃活動で拾ったゴミ。人家と離れたへんろ道沿いでは、不法投棄が目につき、歩き遍路さんは心を痛める。

国、四国」そんな言葉も定着してきたようである。行政は道案内の看板を建て、遍路道の調査を始めている。大学では遍路を授業として取り入れ、また引き籠りの若者達のグループが、毎年やってくるようになった。遍路小屋を建てるグループ、遍路道を掃除するグループと、多くの仲間も生まれた。10年という歳月をかけてこそ生まれた仲間である。

世界遺産という手段で、「共に生きる」



昨年のフォーラム (H17.7.2)

というメッセージを目的に運動を続けてきた。夢は語るだけでは夢におわる。行動することで現実となる。この原稿を終えたらすぐに、スペインの世界遺産を視察に行く予定である。また皆さんに報告ができればと思っています。